

マイスターのささやき「レンタカーで巡る 世界遺産！」

大阪府豊中市 世界遺産マイスター 森瀬 英司

◇第4話 「モスタル旧市街の石橋と周辺」(ボスニア・ヘルツェゴビナ)

「ドゥブロヴニクの旧市街」(クロアチア共和国)

翌日はボスニア・ヘルツェゴビナ（以下、ボスニア）の世界遺産モスタルへ。

そして、帰路クロアチア共和国（以下、クロアチア）のドゥブロヴニクへ寄ってから、コトルに戻るという、約 500km の日帰りドライブを予定しました。

コトルからモスタルへのルートは様々ですが、美しいアドリア海を臨む海岸沿いの道路を辿ることにしました。コトルを出ると、リアス式海岸特有の入り組んだ地形を丁寧になぞりながら、よく整備された道路を進みます。代わり映えしない単調な景色も、対岸側の復路では、また違ったものに見えて、運転していても飽きません。空と海の青さと家々のオレンジ色のコントラストが、目に優しく映ります。車も少なく、お薦めのドライブコースです。リゾートの町をいくつか過ぎた、山に差し掛かるところで、国境検問所がありました。まずは、モンテネグロ出国ゲート。そして、しばらく進むと、クロアチアの入国ゲートです。レンタカーを借りる際に、このふたつの国に入ることを事前申請し、24 ユーロ（おそらく保険代）の追加料金を支払いました。車では乗り入れすることのできない国々もあり、今回はマケドニアと旧ユーゴスラビア共和国、アルバニア共和国が叶いませんでした。出入国ゲートでは事前申請済みの出入国書類をあらためて確認されることはなく、パスポートを見せるだけでスムーズに通過できました。ユーロ圏外の国籍を持つ人々には、その都度、パスポートに入国スタンプが押されるので、時間がかかり、ゲート前は渋滞してしまいます。私もスタンプを確認し、ようやくクロアチアへ入国です。

クロアチアに入っても、特段、景色や道路状況が変わることはありませんが、ドゥブロヴニク空港を過ぎて市街地に近づくと、車が多くなり、大規模な観光地の様相を呈してきます。こちらには帰路に立ち寄る予定なので、街並みを見下ろす高台のバイパスで通過。しばらくすると、今度はクロアチアを出国、ボスニアに入国へと続きます。ゲートが片側一車線しかないため、かなり渋滞し、通過するのに 30 分はかかったと思います。日本人は VISA が不要で、パスポートにスタンプを押されるだけでスムーズです。そして 20 分ほど行くと、先ほどボスニアに入国したばかりなのに、ゲートが現れました。なんだろう？ と思っていると、ボスニア国旗の向こう側に、クロアチア国旗が棚引いています。なんと、ボスニアとクロアチアの国境だったのです。GPS 任せであまり事前に道路をチェックしておらず、ボスニアに入ればそのままモスタルへ行けるものだと勝手に思い込んでいました。その田舎道は、GPS 上では、クロアチアからボスニアへ入国後、再度クロアチアに戻り、ボスニアのモスタルへと辿る幹線道路として、示されていました。そうか……と、10 年前の記憶が急によみがえってきました。その当時、VISA が不必要だと誤解していた私が、ボスニアの入国審査官とひと悶着しながらも突破した、あのゲートだったのです（第3話「小さなささやき」参照）。もう苦笑いするしかありません。今回はボスニアの入国審査官もにっこり笑みで、パスポートにスタンプを押してくれました。

地図をよく見れば分かるのですが、実は面積 20 平方 km ほどのドゥブロヴニクだけが、クロアチアの領土から切り離されていて、ボスニア国内で唯一アドリア海に面しているネウムの街に、周りを囲まれています。なぜドゥブロヴニクだけが飛び地になっているのかというと、約 500 年前からバルカン半島で続く幾多の戦禍や領土の奪い合いといった歴史の結果です。とはいえ、繰り返しの出入国は、車移動ならではの体験でもあります。モンテネグロを出国後、クロアチアとボスニアで結局 3 回の出入国を経験し、およそ 5 時間のドライブでようやくモスタルに到着しました。海岸線を遠ざかり、ボスニア内部へ進むと、牧歌的な田舎風景が広がります。また、道路状況は芳しくなく、舗装工事があちらこちらで行われていました。



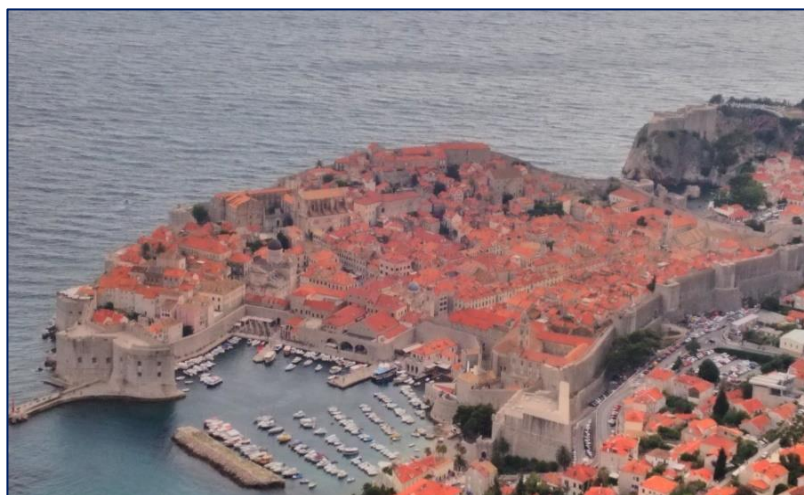
モスタルは、アドリア海沿岸の明るい雰囲気と異なって、オスマン朝時代の影響が色濃く残り、イスラム文化の香りがします。中心街からはモスクのミナレットも見え、ワープして、まるでどこかトルコ共和国の街にでも来たかのような錯覚を得ました。お目当ては、ネレトヴァ川にアーチが掛かる石橋、「スタリ・モスト」です。ボスニア紛争で 1993 年に破壊されてしまいましたが、ユネスコによる協力の下、トルコからの支援で

復元され、2004 年に元の美しい姿を見せることができました。橋のたもとには紛争中に破壊された街や人々の様子の写真が展示され、紛争への悲しみが込み上げてきます。10 年前は簡単に来られる場所ではありませんでした。しかし今では世界中からの観光客であふれています。復元された美しい街並みや地元住民の方々の笑顔を見ていると、過去の悲劇とは対照的な平和のありがたさを、しみじみと感じさせる場所でした。キリスト教圏での異文化に戸惑いながらも、元来トルコの雰囲気が大好きな私にとっては、イスラム的な通りの賑わいとトルコチックな料理を大いに楽しめた時間でもありました。

もと来た道に戻り、「アドリア海の真珠」と呼ばれる、ドゥブロヴニクの旧市街に着いた頃には、もう陽が傾きかけていました。ドゥブロヴニクは詳しい方も多いかと思いますが、かつてはラグーサ共和国として、15~16 世紀にはヴェネツィアと並ぶ貿易都市として、栄えたところですが、当時の面影を色濃く残す旧市街は、1979 年、世界遺産に登録されました。しかし、1991 年に連邦軍とユーゴスラビア人民軍との紛争が勃発。聞くとところによると、紛争時、世界遺産に登録された街は攻撃されないだろうと周辺市民が逃げ込んだそうですが、一縷の希望は見事に裏切られました。4 年間にも亘る戦禍で旧市街は甚大な被害を受け、一時は危機遺産リストに記載されていました。その後、地元市民の懸命な復興努力で危機遺産から脱し、今では風光明媚な街並みを取り戻しつつあります。

青いアドリア海に浮かぶ出島風の旧市街は、わずか 500m 四方で、堅牢な城壁に囲まれています。美しいオレンジ色の葺屋根を持つ家々が密集し、中世の面影を残しています。大理石が敷かれた大通りには、散策する人たちを多く見かけます。ちょっと入った薄暗い路地裏にも、オープンエアに椅子やテーブルを並べるレストランが軒を連らねています。コトルの街と造りはよく似ていますが、こちらの方がはるかに大規模で、

賑やかさが違います。10年前に訪れた時とは比べものにならないほど、人口もぐっと増えている気がします。さすがクロアチアきっての大観光地です。また、背後のスルジ山を上るロープウェイは、以前は、支柱や建物に銃撃戦の痕跡がそこかしこに残っており、ケーブルさえ断絶された状態でした。ところが現在は、修復され、戦争などなかったような顔をして、大勢の観光客を運んでいます。文化財の保存はもちろんのこと、痛ましい戦争の記憶を留めておくことも大事なのではないのでしょうか。モスタルでの思いに重ねて、世界遺産保存の意義を少し考えてしまいました。



うっすらとした10年前当時の記憶を辿りながら、日の暮れた街中をゆっくりと散策しました。教会や埠頭、城壁など旧市街の佇まいは、何も変わっていない印象を受けました。路地沿いレストランの味も変わらず、名物イワシの塩焼きを美味しくいただきました。この後も運転するので、ワインは我慢です。いつまでもこの中世の雰囲気癒されていたのですが、これから国境を越えて、約90km先のコトルまで戻らねばなりません。後ろ髪を引かれる思いで、ドゥブロヴニクを後にしました。

市街地を出立した帰り道は、街灯もなく、漆黒の闇世でした。スピードを落とさねばなりません。昼間とは様子が一変しい、景色などもまったく見えません。ヘッドライトはアップビームにしたままの運転です。海外での夜の運転は極力避けているのですが、仕方ありません。国境を通過する車も殆ど無く、暗くて標識を見落としてしまいました。入国ゲート手前の入口を誤り、トラック専用口に進入してしまいました。バックしようにも、背後の遮断機のバーが上がらず、立ち往生。にっちもさっちも行かない状況で困っていると、屈強な係官が駆け込んで来ました。完全に不審者扱いの表情です。係官にパスポートを見せながら、入口を間違った事態を説明すると、強面が急に笑顔で丁寧な対応に変わりました。これも日本のパスポートの力かもしれません。遮断機のバーをすぐに開けてくれました。なんとか事なきを得ましたが、眠い目をこすりながら、コトルの宿に戻ったのは、既に日付も変わろうとする頃合いで、街も寝静まろうとしていました。

